閉 会 挨 拶

「社会と基盤」研究会・研究代表者　町村 敬志

まず、長時間にわたり、大変ありがとうございました。個人的には、今日の研究会のなかで名前の出てきた AbdouMaliq や Graham といった方とは、以前、ある都市研究の英文雑誌の編集委員会で何年も毎年会っていて、そのなかで、こういう議論が確かにいろいろ闘わされていたことを懐かしく思い出しました。日本だと、どうしても学問単位に仕切られてしまって会話や対話ができないことが多いけれども、今回のこの場は珍しく、すごく刺激的に、いろいろな分野を超えた議論ができる機会であったことが、とても印象的でした。ちなみに、その編集委員会には、AbdouMaliq と Graham 以外に、政治学の Neil Brenner がいて、さらに Harvey Molotch もいました。Molotch は、ニューヨーク大学のすごく皮肉っぽい社会学者で、もともとはマルクス主義にも近い権力論で有名でしたが、近年はすっかり研究が変わっていて、やはりモノのことをやっていたんですね。ニューヨークで普通に消費されている消費財、日常生活の資材（スタッフ）、まさにモノが、どういうふうに作られたり、あるいは象徴的な機能を持っているかという研究をやっていました。だから、Graham にしても AbdouMaliq にしても、Molotch にしても、分野も出発も全然違うけれども、皆、モノという点に収斂しながらどこかで接点をもつ研究を当時やっていました。ちょうど 2006-2007 年ぐらいだったと思うんですが、今から思うと、やはりそれは時代状況なんですね。9.11 より後っていうことはあるけれども、グローバル化とか新自由主義とか、それから情報化・ICT 化などの議論が出尽くすなかで、都市、さらにもっと広く、いわば社会をどう捉え直すかということをめぐる模索のなかで、異なる分野の研究者たちが、なんとなく流れ寄っていったところが、今でいうとマテリアル、モノであったのだな、ということを、今にして思います。10 年経って議論が非常に煮詰まってきたことが、今日の会でよくわかりました。と同時に、議論が進んだことでかえって見えなくなってしまったものはないのか、といったことを含めて、今日あらためて、いろいろ考えさせられたというのが、感想その１です。

感想その２は、途中の議論でも紹介されていたとおり、このマテリアルとかインフラについての議論は、日本でも以前からたくさんあったということに関わります。たとえば豊橋のこの地域に来るのが僕は２回目になります。愛知大学に来るのは実は初めてなんですが、この少し外の高師ヶ原という旧開拓地で豚を飼っていた農家の方に、10 年くらい前にインタビューに行ったことがありました。なぜかというと、当時自分はダム研究をおこなっていました。その方はもともと奈良の吉野の山奥に住んでいたのですが、昭和 30 年頃にダムが出来て、水没のため追い出されてしまったわけです。電源開発（今の J-POWER）が、その当時たくさんダムを作っていたわけですけれども、豊橋のこの場所は、追い出された村の人びとを開拓地に移住させて、山の人が多いので農業を知らないこともあり、農業の仕方を教える「電源の家」というのを電源開発が作って、それで農業指導を行ったというようなことがあった場所なんですね。さらに言うと、その方はもともと家の次三男だったんで、まだ小さい頃、戦時中に開拓少年義勇軍か何かで満州に行かされ、戦後奈良に戻ってきた。しかし、そこでまた、ダムのために追い出さ

れたためにここに来た、といったことがあったんですね。その人は、社会のインフラ整備（軍事も含め）のために繰り返し犠牲を強いられてきた。犠牲者なんだけれども、昔語りではあるとはいえ、こうしたことを懐かしそうに語ってくださった。その頃はもう付近が都市化してしまったため豚を飼うのをやめていたんですけども、それなりに成功していた。そこで、マテリアルなものが引き起こす犠牲について、むしろ幸せそうなものの語り方をしてくださったのが、印象的でした。こちらは、本当は「怒り」や「悲しみ」といった違う話をむしろ内心期待していたんだけれども、話が全然そういう方向に行かなかったことを、なんとなく思い出していました。

マテリアルとかインフラとかが拡張する時代を生きていた人というのは、先ほど難波さんが言われていたようなフェティシズムみたいなものを、もろに受けとめてしまっているところがあって、結果的に、「いろいろ苦労はしているけども・・・」といった形の語りに収斂していくことが多い。そこが罠といえば罠ではあるけれども、確かにある種のリアルさがある。その後、拡大の時代は終わり、高原状態、プラトー状態を迎え、やがて今度は縮小していく。そんなときに、このインフラの語り方がどう変わっていくのか。このようなことを含めて、まさに今日、マテリアルなものをめぐるさまざまな新しい課題がいろいろ問われ直したと思います。今日の報告者それぞれの方が対象としている社会は違っていたし、マテリアルなものの拡張段階、平衡段階、あるいは縮小段階といった各段階の違いによって語り方は違っていた。しかし、大事なことは、こうした違う段階の社会がグローバルな社会においては現に共存していること、そして、研究者の世界のなかでは同じ概念や思考がトラベリングしていきながら領域の違いを超えて共通のリアリティを作っていくことがあることだと思います。私たちは本当に分かり合えたのか。実際には課題はまだ残っていますね。そのあたりについて、これを機会に、もっと議論を深めていけたら、とてもいいんじゃないかなと感じました。

ということで、とても刺激的な４時間でした。植田さん、それから愛知大学のみなさま、それからもちろん、この場で報告・コメントいただいた皆様方に、あらためて感謝の拍手をお願いし、挨拶にかえさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。